

12歳のための小説すらすら講座

第8回 ハガキ文学大特集!

今回は、これまで送られてきたハガキ文学作品を一挙大紹介! スペシャル版でおとどけするよ!!

小学五年生まで大活躍中の文具の国メンバード!



本講座の登場人物
万年筆先生

監修/奈良裕明(作家)

89年「チンドン・ジャン」にて第13回すらすら文学賞受賞。96年より「松涛スクール/文章の学校」に講師として参加。また、自治体主催の文章教室で、11歳から82歳まで指導した実績を持つ。著書に「小説を書くための基礎メソッド」(雷鳥社刊)など。

今月は、大反響のハガキ文学のスペシャル。たくさん送られてきたなかからベスト5を選んだ。さっそく紹介しよう!

どんな作品が送ってくるか、楽しみだな!!

大建千浩/北海道

機敏で気まぐれな猫の動き、夜の描写がうまい。テンポある会話文もよい。猫は主人公の「心にある闇」の比喩なのか? そのがもうちょっと書かれていけば、読み手に主人公の気持ちさがさらに伝わるぞ。

「猫は、深夜の静寂を愛する。その瞳は、夜の闇を照らす。猫は、夜の静寂を愛する。その瞳は、夜の闇を照らす。猫は、夜の静寂を愛する。その瞳は、夜の闇を照らす。」

ある夜、静寂を愛する猫は、夜の静寂を愛する。その瞳は、夜の闇を照らす。猫は、夜の静寂を愛する。その瞳は、夜の闇を照らす。

★今月のきらきら賞 BEST5発表!★

起承転結がちゃんとあり、主人公の心の揺れもうまく表現されている。願いがかなう「ミサンガ」というモチーフも効いている。「結」がやや急いだ展開になってしまったが、読んだあと、さわやかな気持ちになる作品だ。

魅力的な「キャラクター」設定
登場人物のキャラをちゃんと決めると、イキイキ動いてくれてストーリーがおもしろくなる。それぞれの性格に合った口調や行動を描こう。

説明でなく「描写」せよ
説明ばかり続くと読み手は飽きる。小説には的確な描写が必要。たとえば「彼は短気だ」は説明、「彼は舌打ちしてケータイを投げた」、これは描写だ。

「起承転結」は大事だ
短くても物語には起承転結が不可欠。その短い起承転結を積み重ねれば、長い小説も書けるぞ。全体の構成を決めて書き始めよう。

書き出しには「謎」を
冒頭に謎を提示すると、読み手はスッと物語に入っていける。印象が残り、続きが読みたくなる書き出しを心がけよう。

ラストは「ストン」か「余韻」
歯切れよく話が終わると、読み手は「なるほど」と納得する。逆に余韻を残すラストもアリだ。いずれかの型で、最後に読み手の心を動かそう。

南の海のメガフレラ/神奈川県